

令和3年度第2回病態・薬物治療関連教科担当教員会議議事録

令和3年度第2回病態・薬物治療関連教科担当教員会議を、2022年3月24日（木）にオンライン（Zoom）にて開催した。参加者は95名であり、概要と主な議事等は下記である。

令和3年度第2回病態・薬物治療関連教科担当教員会議

日時：令和4年3月24日（木）16時から17時

方法：Zoom

テーマ：薬学教育モデル・コアカリキュラムの改定と病態・薬物治療関連教科
について

プログラム：

1) 令和3年度担当教員会議報告

第1回会議（2021年10月2日午前）に引き続き開催された「第16回有機化学系教科担当教員会議」・「病態・薬物治療関連教科担当教員会議」合同会議（2021年10月2日（土）12時40分～15時）について、資料1に基づき世話人の小澤（広島大学）より報告があった。

2) 次期世話人選出

協議の結果、「武庫川女子大学薬学部 岡村昇教授」が次期世話人に選出された。

3) 講演

鈴木匡教授（名古屋市立大学）より、「薬学教育モデル・コアカリキュラムの改訂について」のタイトルでご講演いただいた。

4) 事例紹介

小澤光一郎（広島大学）から「広島大学でのPBL教育（資料2）」の事例紹介があった。

5) アンケート結果

会議後にFormsにてアンケート調査を行い、資料3の結果（回答率57%）が得られた。有意義な会であったことが推察され、今後のテーマなどについて下記の提案があった。

【テーマ】

- ・病態薬物治療学で取り上げる病気の種類の追加について。
- ・コアカリの授業では出てこなくても実務実習で出てくることあるから問題ないかどうか（例えば川崎病など）

- ・薬学部単科大学など他の医療系学部を持たない大学と他の医療系学部を持つ大学とでは教育のやり方が変わってくるので今回の広島大学（総合医療大学）の例は一部にしか参考にならないのではないかと。東北薬科や大阪薬科など医科大学と合併できた大学はいいと思う。薬学部しかない大学での取り組みも紹介できるとよい。
- ・新しく公衆衛生薬学を取り入れたりすることは必要で時代背景に合っているが、その分浅く広くなりすぎる懸念も出てくる。古くなった項目を削除して行くことも必要である。
- ・国家試験のここ二年の出題傾向（設問に病態・薬理・実務の関・考えさせる連問題の増加）から、これら領域間での合同会議はできないでしょうか。
- ・コアカリ改訂について。特に実務系（薬。医学など）との連携したカリキュラム案について。
- ・各大学の独自という点がある意味難しいと感じます。連携できる他学部（看護、医学など）がある大学や学生数も少ない国公立大などは、アレンジができる気がしますが、私大など学生数が多いと難しい気もしますので、事例などを知りたいと思います。
- ・広島大学の事例を拝見し、すごく参考になりましたが、上記とよく似た内容になりますが、私大となると、学生数が多いことと、他学部（看護や医歯学など）との連携が取りにくいと、そのような私立大の事例なども拝見したいと思います。
- ・薬学会の時期に行う場合、もう少し早くに実施の有無を知りたいです（薬学会の参加や出張の手続きなど）。
- ・臓器別カリキュラムの組み方の事例が知りたいです。
- ・本学はまだ、機能形態学、薬理学、病態・薬物治療学が、科目間の横割りになっています。
- ・科目を横断した対象臓器を基本としたカリキュラムの組み方の事例をお伺いしたいです。

【開催時期・方法】

- ・対面実施が良いと思いますが、zoom 開催も良いと思いました。
- ・病態・薬物治療関連教科担当教員会議については、今後も Zoom での開催が妥当のように思います。Zoom での開催であれば、開催時期は薬学会に合わせる必要はないと思います。
- ・Zoom で会議をするのであれば、学生に対する講義と同じであるが、一方的な情報伝達のみだと、良い会とはならない。途中でブレイクアウトのような機能を利用し、小グループで話す時間などを設けると、もう少し活発な議論ができると考える。

（文責：小澤光一郎（令和3年度病態・薬物治療関連教科担当教員会議世話人））